

こはる先生だいすき

森 はな・作

梅田俊作・絵



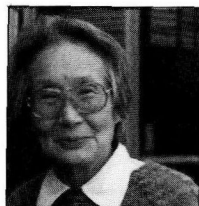
こはる先生だいすき

森 はな・作 梅田俊作・絵



作者●^{もり}森 はな

1909年、兵庫県但馬に生まれる。
32年間小学校の教師を務め、退職
後作家活動に入り、現在に至る。
主な作品に『じろはったん』(日本
児童文学者協会新人賞)『こんこん
さまにさしあげそうろう』(絵本日
本大賞)『一二とうげ』他多数。



画家●^{うめ だしゅんさく}梅田 俊作

1942年、京都府丹後に生まれる。
創作絵本に『ぼくってなんだろう』
『ばあちゃんのなつやすみ』(絵本
日本賞)『このゆびとーまれ』(講談
社出版文化賞)『がまんだがまんた
うんちっち』他多数。



ポプラ社のなかよし童話 39

こはる先生だいすき

1987年 7 月 第 1 刷 ©

作●^{もり}森 はな
絵●^{うめ だしゅんさく}梅田俊作

発行者・田 中 治 夫

発行所・株式会社**ポプラ社** 東京都新宿区須賀町5

印 刷・瞬報社写真印刷株式会社 〒160 振替東京4-149271

製 本・富士製本株式会社

電話(営業)03-978-0051
(編集)03-357-2216

編集・有賀澄江

落丁・乱丁本はいつでもおとりかえいたします。

N.D.C.913/95P/22cm
ISBN4-591-02533-0

そうやなあ。

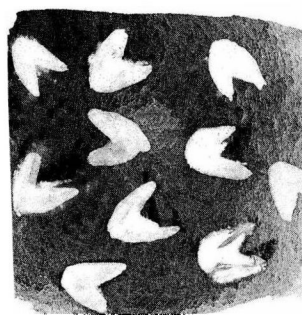
あれは、わたしが、はじめて先生せんせいになった年としのこと。

そのときわたしは、はたち（二十歳さい）やった。

但馬たじまの山やまのおくの小さな学校がっこうやった。

校舎こうしゃは小高いおかのこだか上うえにあって、広い運動場うんどうじょうのま

わりに、サクラの木きがたくさんあった。



四月^{がつ}はじめの始業式^{しぎようしき}のころは、寒い^{さむ}但馬^{たじま}ではまだ
つぼみはみんなねむっとした。

けども、わたしはサクラの花^{はな}ざかりのように、はり
きっとした。

うけもち^{ねんせい}は二年生^{ねんせい}やった。

「おはよう。」

大きな声^{こえ}でいうて、教室^{きょうしつ}へはいった。子どもたち
が、手^てをたたいてむかえてくれたので、うれしゅうて、
ますますはりきって、黒板^{こくばん}の前^{まえ}に立^たった。

なかむかい
中向 こはる

と、黒板こくばんにかいた。

「わたしは、中向なかむかいこはるです。中向なかむかいはいいにくいから、こはる先生せんせいとよんでほしいんです。

こはる先生せんせいってよんでみて。」

子どもたちが、こはる先生せんせいって声こえをそろえてよんでくれた。

「はい、こはる先生せんせいです。きょうからみんなと勉強べんきょうできてうれしいです。よろしくね。

こんなにはりきってます。」

いうて、両手りようてのにぎりこぶしをふってみせた。

子どもたちも、わあわあいいながら、両手りようてのにぎりこぶしをふってくれた。

男おとこの子が十二人にん、女おんなの子が十人にんという小さなクラスや。

「こはるってかわいい名なでしょう。こはるいうのは、春はるのはじめということ。

わたしは、まだ春はるのはじめなの。



いまから春^{はる}がくるの。

たのしい春^{はる}がくるんだもん。

子ども^こたちが、

春^{はる}がきた 春^{はる}がきた

どこにきた

と、うたいだした。わたしも、

春^{はる}がきた 春^{はる}がきた

ここにきた

と、両手^{りょうて}をいっぱいひろげてうたった。



きようしつ
教室の中は春や。

「さ、名前なまえをよびます。大きな声こえでへんじしてね。」

はやく、ひとりひとりおぼえようとおもって、名なを
よぶたびに、子こどものかおを、じっと見みた。

みんな元氣げんきに「はい」と手てをあげて、へんじをし
てくれた。

おんな
女の子こももうおわりになって、出席しゅつせきぼを見みた。

やました
山下やましたはと。はとってかわった名なやな。どの子こかな

とおもいながら、

「山下^{やました} はとちゃん。」

とよんだ。へんじがない。

「山下^{やました} はとちゃん。」

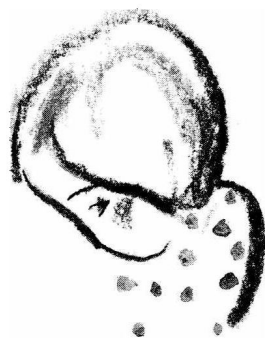
へんじがない。

もういちど、「山下^{やました} はとちゃん。」

やっぱりへんじがない。

けっせきしているのかなとおもって、きよろきよろ

見^みまわした。



「先生、はとな、一年生ねんせいのときからいっぺんもへんじ
したことはないんやで。」

いたずらそうな男おとこの子が、口くちとんがらかしていうた。

「そうやで、いっぺんもものいうたことはないんやで。」

「幼稚園ようちえんのときは、ようしゃべりよったのに一年生ねんせいに
なつてから、ものいわんようになってしもとんや。」

つぎつぎいわれて、びっくりして、どの子こがはと
ちゃんやろかと思みまわした。

「この子こがはとや。」

ひとりの男の子^{おとこ}が立^たってゆびさした。

はとちゃんは、わたしのすぐ前^{まえ}のせきにおった。

からだがちいそうて、すこしちぢれ^け毛^けで、すこし、
いろがくろうて。

でも、はなすじのとおった、ととのったかおした子^こ
やった。

「ごめん、ごめん、あんたがはとちゃんね。」

わたしは、そばへいって、かおをのぞいた。

けど、はとちゃんはどうつむいたまんまや。

「はい、わかりました。はとちゃんね。」

わたしは、そつとあたまをなでてやった。

あくる朝あさも「山下やました はとちゃん」ってよんだけど、
だまってうつむいとる。

あくる日ひも。そのあくる日ひも。

「先生せんせい、よんでもあかんって。一年生ねんせいのときも先生せんせいが

おこって、はとのところとばしよったんやで。」

男おとこの子こがそんなことをいう。

「そんなことないわな。へんじしてくれるわな。」

わたしは、はとちゃんを見^みた。

はとちゃんは、ちらっとわたしを見^みて、かなしそう
なかおした。

わたしは、まい日^{にち}よんだ。

「山^{やま}下^{した} はとちゃん。」 「はい。」

「山^{やま}下^{した} はとちゃん。」 「はい。」

わたしは、じぶんでよんで、じぶんでへんじをした。

なん日^{にち}かして、「山^{やま}下^{した} はとちゃん。」とよぶと、ク



ラスの子が声をそろえて、「はい。」とへんじをするようになった。

みんながわらっても、はとちゃんはじっとうつむいてる。

ちえがおくれとるというわけではない。

一年生ねんせいになってから、口くちをきかんようになったのは、なにかわけがあるんやろ。そのわけを、おうちの人ひとにくわしくきくこと。

はやく口くちをきかそうとあせらんと、はとちゃんとな